

親鸞佛教センター副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第II期・第13回(通算第19回)

第三章 「口伝の真信」の核心——悪人成仏のため(3)

加来 雄之

「浄土真宗のひとは悪人になりて成仏す」

第三章 原文・先人訳

蓮如書写本第三章 (段落と番号①~⑦は加来による)	第三章先人訳(安良岡口訳)(『歎異抄全講読』99頁) * ◻ は補ったと思われる箇所。下線は検討したい箇所。
<p>三 一</p> <p>①善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。 ②しかるを、世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや 善人をや。 ③この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。 ④そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。 ⑤しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。 ⑥煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。 ⑦よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。</p>	<p>第三章 一</p> <p>①善人でさえやはり、往生を果たすのだ。まして、悪人は言うまでもないのだ。 ②それなのに、世間の人は、いつも、「悪人でさえ往生する。まして、善人は言うまでもない」と言っている。 ③このことは、一応は、理由があることに<u>近いようであるが、本願と他力との趣旨</u>に反している。 ④その理由は、<u>自己の力を信じて善事を実行する人</u>は、〔仮の〕他力を〔ひたすらに〕頼りに思う心が欠けているので、阿弥陀仏の本願〔を受けとるべき性質のもの〕ではない。 ⑤そうではあるがしかし、〔その〕自力の心を根本から転換させて、〔仮の〕他力を頼み申し上げれば、眞実の<u>浄土</u>の往生を果たすことになるのだ。 ⑥<u>煩惱が十分に身に備わっているわたくしたちは、どのような修行によっても、生死〔を続ける迷いの境地〕を完全に脱け出ることがあるはずがない</u>ということをふびんにお思いになって、〔救いとろうとなされる本〕願をお起こしになった、根本の御意志は、〔善人よりも、〕悪人が仏と成るためであるから、〔仮の〕他力を頼み申し上げる悪人こそ、ほんとうに、往生〔できる〕<u>正しい種</u>なのである。 ⑦それゆえに、「善人さえも往生するのだ。ましてなおさら、悪人は〔必ず往生できるのだ〕」と、〔親鸞聖人は〕おっしゃいました。</p>

I 前回の復習

・私たちは『歎異抄』第三章の「悪人」を『歎異抄』の文脈で理解することにつとめたい。「世のひと」（世間の権力や権威による）の言う悪人ではなく、如来の本願にもとづく人間觀に立って理解したい。そのことは、それぞれの時代社会のにおける悪人という觀念を無視することではなく、その觀念を根底から問い合わせ直す立場を得ることではないだろうか。

「善惡共に宿業である。法よりみれば善人悪人は平等であるが、本願の正機としての機よりみれば悪人を以て本願の正機として、これがために仏は選択本願を發し不可思議兆載永劫の御苦勞をされたのである。」（曾我量深『歎異抄聽記』）

・第三章のはじめに掲げられる主題が、「善人なお往生す」ではなく「善人なおもて往生をとぐ」と表現されている意義について、親鸞は、「自力作善のひと」は「自力のこころをひるがえして他力をたのみたてまつれば真実報土の往生をとぐるなり」と解している。自力作善という関心を生きる人が他力（如來の本願力）を受けとめるには、「自力のこころをひるがえして他力をたのみたてまつれば」という「回心」が必要である。また「真実報土の往生をとぐるなり」という表現には「果遂の誓い」という方便のはたらきを見出すことができる。

他力中の自力——方便化土

自力の行——第十九願 懈慢辺地

自力の心——第二十願 疑城胎宮

他力——真実報土

・また『歎異抄』における善導・法然の伝統を考えると、『觀經』の下下品の悪人というべきであろう。

=====

II 本文読解

⑥ 煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなることあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。

・⑥は、①の「いはんや悪人をや」についての親鸞の解釈である。

・⑥では①の「悪人」が以下のように展開している。

「煩惱具足のわれら」→「いづれの行にても、生死をはなることあるべからざる〔われら〕」→「他力をたのみたてまつる悪人」

「煩惱具足のわれらは」

・⑥を通すと、①の「悪人」とは、第一に「煩惱具足のわれら」である。この表現は、「自力

作善のひとは」という表現に対している。「自力作善」は私たちの思いによる妄念を、「煩惱具足」は仏智に照らされた私たちの身の事実をあらわしている。また、「われら」は「ひと」というよそよそしさに対して親しさをもつ。「具縛は、よろずの煩惱にしばられたるわれらなり。煩は、みをわざらわす。惱は、こころをなやますという。……みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」（『唯信鈔文意』『聖典』（初版）552—553頁）という表現もあるように「みなともに」という表現に呼応している。またこの「われら」は、『歎異抄』の特徴的な表現「われもひとも」に通ずる。

「「二者深心即ち是れ真実の信心なり。自身は是れ煩惱を具足せる凡夫、善根薄（ウシ）少にして三界に流転して火宅を出でずと信知す。今弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声聞等に及ぶまで、定めて往生を得と信知して、一念に至るに及ぶまで疑心あることなし。故に深心と名く」と。」

（智昇法師『集諸經禮懺儀』中『往生礼讚』
信卷引用『聖典』（初版）222頁。行巻にも引用。『聖典』191頁）

「真実の信心」は二つの信知されるべき内容をもっている。一つは「自身」についての信知であり、もう一つは「今、弥陀の本弘誓願」である。善導の「煩惱を具足せる凡夫」は、阿弥陀仏の悲願によって見出され教えられている人間の実相であり、私たちが自身について信知すべきことである。このように「煩惱具足のわれら」と受けとめ直されるとき、①の「悪人」は信知の内容でなければならない。

「これは善人というのも悪人というのもその人の自覚である。なにか他人をさして善人悪人というのではない。自分をぬきにしてどこかに善人悪人があり、その中の悪人を正機とするというのではない。これはやはり機の深信、〔中略〕自分みずから出離菩提の因もなく、往生の手がかりもないと自覚している人が悪人。」（曾我量深『歎異抄聴記』）

- ・「煩惱具足」の「具足」は、煩惱を現行（現実態）としても種子（可能態）として完全に備えているという意味である。それは第十三章では「さるべき業縁のもよおさばいかなるふるまいもすべし」と表現される業縁存在を意味する。
- ・仏道において「悪」を決定するのは煩惱である。「悪人」とは、その煩惱を具足しているのが「われら」であるという自覚を離れてはない。
- ・また「煩惱具足」ということは、「凡夫」というは、無明煩惱われらが身にみちみちて臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり」（『一念多念文意』『聖典』（初版）545頁）と表現されている。私たちは、縁さえ整えば、苦しみ悩むものであり、生死（しょうじ）の中の存在である。

「いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざるを」

- ・第二に、「煩惱具足のわれら」は「いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざ

る」身の自覚をもつ存在である。『歎異抄』第二章における「いずれの行もおよびがたき身」であり、「とても地獄は一定すみかぞかし」という自覚を生きるものとなることである。

「あはれみたまひて願をおこしたまふ本意」

・「あはれみたまひて願をおこしたまふ本意」とは、阿弥陀仏の因の法藏菩薩の発願の本来の意志を意味する。第一章では「罪惡深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」と表現されていた。その願の本意とは、選択本願であり、第十八願の心である。この「願をおこしたまふ本意」を親鸞は次のように感銘深い言葉をもって主体的に受けとめていたことが伝えられている。

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんをおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そらういし

(『聖典』(初版) 640 頁。蓮如本の表記に変更。)

・ちなみに親鸞の用例では「本意」は、釈迦諸仏の出世の本意として用いられることが多いが、以下の「本意」に近いと言えるかも知れない。

「横は、よこさまという。よこさまというは、如來の願力を信ずるゆえに行者のはからいにあらず。五惡趣を自然にたちすて、四生をはなるるを横という。他力ともうすなり。これを横超というなり。横は豎に対することばなり。超は迂に対することばなり。豎はたたざま、迂はめぐるとなり。豎と迂とは自力聖道のこころなり。横超はすなわち他力真宗の本意なり。」(『尊号真像銘文』『聖典』(初版) 514 頁)

この「他力真宗の本意」が「悪人成仏」と表現される。

「悪人成仏のためなれば、」

・「悪人成仏のため」とある「悪人」の「成仏」とはどのようなことであろうか。悪人が善人に変わってから成仏するという意味では決してない。

上述してきたような本願の人間觀に基づいた悪人（「煩惱具足のわれら」）における成仏を、親鸞が大事にした「念佛成仏」という表現を手がかりに考えてみたい。この「念佛成仏」という表現は、後善導・法照の『五会念佛略法事儀讚』の「念佛成仏は是れ真宗なり」を典拠としているが、親鸞によって浄土真宗を表現する核心的な言葉として採用された。

「明らかに知りぬ、是れ凡聖自力の行に非ず。故に不回向の行と名づくる也。大小聖人・重輕悪人、皆、同じく齊しく選択大宝海に歸して、念佛成仏す応し。」

(行巻『聖典』(初版) 189 頁)

「故に宗師は、「光明名号を以て十方を摂化したまう。但、信心をして求念せし（使）む」と言へり。又「念佛成仏是真宗」と云へり。又「真宗遇い亘し」と云へるおや、知る可し、と。」

(行巻『聖典』(初版) 190-191頁)

私は、「選択大宝海に帰す」や光明名号の摂化と信心との関係などから、「悪人成仏」は悪人という自覚における念佛は、光明名号の摂化というはたらきを証明する、それが成仏という事実であると理解したい。

「悪人成仏（機）

「念佛成仏（法）

・「のためなれば」——「…ためであるので」の意。——他力をたのみたてまつる悪人を、象徴的にあらわしているのは信巻に引用される『涅槃經』における阿闍世である。「阿闍世王の「為」に涅槃に入らず。……我、「為」と言うは一切凡夫、……また「為」は、すなわちこれ一切有為の衆生なり。……また「為」は、すなわちこれ仮性を見ざる衆生なり。」

(信巻『聖典』(初版) 259頁)。

「他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。

「他力をたのみたてまつる」とはどのような生き方か。

「頼」……「頼、贏也」。貝+刺で「金品を袋にとじこめてもうけを得る」意。「余分の利益ある意」(『字訓』)。「あてにする」、「たのもしげなものによりかかること」(『新大字典』)。

「憑」……「憑、依也」(『集韻』)。「よりかかる」「よりどころとする」、また「よりそいつく」(『新大字典』)。「心がかたまる」の意。「机にもたれるを憑といい、その心情を憑という。」(『字訓』)

「仰いでこれを憑むべし。専らこれを行はずべきなり。」

(行巻自釈『聖典』(初版) 190頁)

「難化の三機・難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば」

(信巻自釈『聖典』(初版) 271頁)

親鸞には「頼む」の用例はない。「頼」には功利的なニュアンスがあるのであろうか。ちなみに仏力などをたのむ場合に「憑」の文字を使用することは善導の伝統にもとづく¹。

¹ 「今既に斯の勝益有す。憑むべし。願わくは諸の行者、各おの至心を須いて往くことを求めよ。」(行巻引用『往生礼讃』、『聖典』(初版) 175頁) 「今既に此の増上の誓願有す。憑むべし。諸の仏子等、何ぞ意を励まして去らざらんや」と。(『往生礼讃』、『聖典』(初版) 176頁) など。また元照に「今、所修の念佛三昧に約するに、いまし仏力を憑む。」(行巻引用、元照『觀經義疏』、『聖典』(初版) 185頁) と

- ・なぜ「悪人成仏の正因」ではなく「往生の正因」なのか。

「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」というは、安養淨土の往生の正因は、念仏を本とす、ともうす御ことなりとするべし。正因というは、淨土にうまれて仏にからずなるたねともうすなり。
 (『尊号真像銘文』『聖典』(初版) 527 頁)

本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを唯信といふ。

(『唯信鈔文意』『聖典』(初版) 547 頁)

・なぜ「悪人の自覚」ではなく、「悪人」が「正因」と表現されるのか。衆生が如来の世界と正しい関係を構築する原因是、「煩惱具足のわれら」という自覚によって「他力をたのみたてまつる悪人」となること、つまり自覚することである。機となることは生理的なことでなく、自覚である。

また自覚する「人」を離れて、往生という事実などどこにもない。「人」となることを見失った往生は絵に描いた餅でしかない。

・「悪人」とは、如來の本願が「たすけんとおぼしめしたちける」機をあらわすのである。なぜ「往生の正因」といい、「成仏の正因」といわないのか。

【⑥加来試訳】

煩惱が具足している私たちは、どのような修行においても、生死〔の迷い〕を離れることはありえないことをおあわれみになって、願をおこされた本意〔は〕、悪人が成仏するためなので、他力をおたのみする悪人〔という信知が〕もっとも往生の〔適〕正〔な原〕因なのです。

⑦よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。

・「よて」はこれまでの解釈を受けてもう一度、主題を繰り返しあげるが、単なる繰り返しではない。

①「 善人ナヲモテ 往生ヲトク イハンヤ 惡人ヲヤ」
 ⑦「ヨテ 善人タニコソ 往生スレ マシテ 惡人ハ 」トオホセサフラヒキ」

①と⑦は単なる反復ではない。このように見ると二つの表現で共通しているのは「善人」と「悪人」のみである。「いはんや……をや」から「まして……は」という表現の変化について。①は反語として問題提起的であり、⑤は断定的な表現である。①は明示されてはいないがおそらくは源空の仰せにもとづく、⑤は②③④という親鸞の受け止めを通しての①の仰せの再解釈として理解したい。

(参考) 「動詞マス (増す、サ四) の連用形マシに接続助詞テが付いて副詞となった語。

ある。

……マシテは共通する二つの事柄・状態を比べて、前者より後者が程度が大きいというと
らえ方を示す。」（『古典基礎語辞典』1109頁）

- ・末尾の文に「をとぐ」という表現がない理由。

・文末の仰せを親鸞の仰せと理解するときには「よて」の訳を工夫する必要があるが、「以上のように受けとめれば、「善人でさえ往生することができる。まして悪人は〔往生することができる〕と〔言うことができなければならないのだ〕と〔親鸞聖人は私唯円に〕仰せになりました」というニュアンスで理解してみたい。

- ・佐藤正英氏の見解。

「「とおほせさふらひき」という地の文が受けている親鸞の言葉は、「善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」という短い言葉だけである。「歎異抄」第三条にしるされている親鸞の言葉は、「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」と、その再録であるところの、「善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」だけである。論議にかかる文はいずれも唯円自身の地の文である」（佐藤正英『歎異抄論釈』青土社、2005年。592-593頁）

従来から「おほせ」は、単なる言葉の敬語ではなく、背負わされた言葉というニュアンスを有すると思う。

【⑦加来試訳】

それで、善人ですら往生するのだ、まして悪人は〔往生する〕と、〔親鸞聖人は〕仰せになりました。